

次の文章を読んで、これからのあるべき医療の姿について、あなたの考えを六〇〇字以内で記しなさい。

(原文に適宜省略を加え、改行も一部改変してある)

「いのちは誰のものか」と、よく考えます。間違いなくその人のものです。しかし、病院という閉鎖的空間で働いていると、そのことを忘れてしまうことがあります。

「いのちは地球より重い」という、二十世紀を代表するようなメッセージが医療空間でも幅をきかせて、いのちを守ることは、すべてに優先してきました。二度の世界大戦を経験した人類には、反省をともなった重要なメッセージだったと思います。けれども、戦争に反対して平和を求めたメッセージが、現代ではアンバランスにすり替えられ、ヒステリックにいのちの大切さが訴えられているように思います。

いのちの大切さには、誰も反対できません。しかし、超高齢の方や末期癌の方にたくさんの方を管をつなぎ、まるでスパゲティを体中にまきつけるような姿で最期を迎えさせようとするのは、本当に「いのちの大切さ」を理解していることになるのでしょうか。

臓器移植をすれば救われる心臓病の子どもがいれば、誰でも助けてあげたい、移植手術をしてでも助けてあげたいと思います。誰も反対はしません。死ぬときは自分の臓器を役立てたいと思う人、元気になるために臓器をもらいたい人、それを支える進んだ医学。誰も困らない、三者が満足できる臓器移植がなぜ問題なのでしょう。

死んでいくときに、困っている人のために臓器を役立てたいと思う人もいれば、角膜をあげてしまつて目が見えなくなつたら三途の川が渡れないと心配する人もいるかもしれません。また、体にメスを入れず、きれいな体のままであの世に行きたいという人もいます。最期の在りようくらい、わがままでもいい、勝手にさせてあげたいものです。ヒューマニズムの押し売りは、ぼくは好きではありません。逆に亡くなるときは臓器移植をして役に立ちたいと思つて人の思いは、夢を遂げさせてあげたいものです。

しかし、それは法律で決めるのではなく、リビングウィルの原点に戻るべきです。時間をかけてたくさんの人に呼びかけ、臓器移植を希望するドナーを増やす正攻法が大事だと思つています。いのちは間違いなくその人のものなのです。

子どものできない夫婦が、それぞれの精子と卵子を受精させ、アメリカの貧しい女性の子宮を十か月借りて、自分たちの子どもがくれるようになりました。六百万円でできるそうです。生活に困る女性も助かり、子どものない夫婦にも自分たちの遺伝子をもつた子どもが授かり、それを支える進んだ医学がある。確かに誰にも迷惑をかけず、皆がハッピーになっています。

しかし、生まれてくる子どもがエイズに感染したり障害をもって生まれてきたりという現実が、もう始まっています。六百万円払った夫婦は、契約が違うと子どもを引き取らず、もちろんお腹を貸した女性も自分の子ではないといって引き取りません。いのちを授かった子どもは、どうやって生きていったらよいのでしょうか。

十か月の間、自分の子宮の中で子どもを育てながら、同時に母胎の中でどんな子どもが生まれてきても、育てていきたい、一緒に生きていきたいという「ころ」も育てられるのではないのでしょうか。貸し腹で生まれたエイズの子どもが、すべての人から養育を拒否されている事実をみるとき、人間の身勝手さにいきどおりを感じます。今一度、本当のいのちの大切さを検証すべきだと思っています。

人類は科学万能の二十世紀に、不可能を可能にして寿命を伸ばしてきました。臓器移植の成功した患者の最大の死亡原因が自殺であるという笑えない事実には、ぼくは言葉を失ってしまいます。本当に人類は幸せを手に入れることができたのでしょうか。今一度、立ち止まって、「足るを知る」という先達の言葉を思い起こしたいと思います。

【「成熟した死の選択 インフォームドチョイス」 医歯薬出版 鎌田 實・高橋卓志】